

挑戦，情熱，そして献身， 日本軍「慰安婦」被害者と共に

——韓国挺身隊問題対策協議会常任代表・尹美香の半生——

梁 澄 子

目 次

はじめに

1. 南海での貧しく幸せな幼少期
2. 水原での憂鬱な中学時代
3. 高校，大学
4. 女性問題への関わり，そして挺対協へ
5. ハルモニたちとの出会い
6. 結婚，そして夫の逮捕
7. 挺対協に辞表
8. 民和協，女性財団，そして再び挺対協に
9. 姜徳景ハルモニとの約束

はじめに

臨月も間近と思われる大きなお腹で，満面に笑みを浮かべてベコッと会釈する愛想の良い女性。私の脳裏に焼き付けられた尹美香（ユン・ミヒャン）との「初対面」の記憶だ。しかし，私が初めて韓国の地を踏み，韓国挺身隊問題対策協議会（以下，挺対協）を訪れたのは1992年3月末。尹美香は当時すでに挺対協の幹事¹⁾として働いており，長女ハナを生んだの

1) 韓国の市民団体では「幹事」は役職のない事務局員を指す用語だ。

は翌1993年11月9日だから、実際には私が記憶する「初対面」以前に、私たちは出会っていたはずだ。にもかかわらず私の記憶の中で「初対面」の尹美香が大きなお腹をしているのは、その日、尹美香について語った山下英愛の言葉が、私に大きな衝撃を与えたからにちがいない。

「彼女の夫は今、政治犯で捕まっていて、彼女は今、いろいろと大変なのよ」

初子の出産を目前にして、夫が国家安全企画部（以下、安企部）にでっち上げられた事件で捕まり、夫に加えられた拷問について告発状を出す一方で、挺対協の実務と、名乗り出た日本軍「慰安婦」被害者の対応に追われる日々。どれほどの不安を抱えて、その状況を生きているのかに対する気の遠くなるような想像が、目の前で笑顔を絶やさずに立っている「尹美香」を、その日、私の記憶に明確に刻印させたのだ。

その後、四半世紀もの間、海の向こうにいる尹美香に会うたび、いつも彼女は、私には想像もできないような逆境を生き、常にそれに打ち勝つ努力をしていた。そして、日本軍「慰安婦」被害者たちとの出会いと格闘を通して、変化を重ねてきた。それは、日本でただ一人、日本政府に謝罪と賠償を求めて提訴した宋神道さんの裁判支援をしながら、宋さんとの出会いと格闘を通して多くを学び得てきた私自身とも重なる体験だ。

そんな私が見てきた尹美香について、いつか書きたいと思いつけてきた。本稿はその最初の試みで、彼女の「今」に影響を与えたと考えられる両親や幼少期のことに触れた上で、挺対協活動に飛び込んで一旦辞める1997年までと、2002年に復帰することになるまでをまとめたものである。挺対協に復帰後、事務局長から常任代表となり、実質的に挺対協運動を大きく転換・発展させてきた尹のリーダーシップについては別稿にゆずりたいと思う。

1. 南海での貧しく幸せな幼少期

1964年、尹美香は慶尚南道南海郡南面唐項里で産声を上げた。3面を海に囲まれた朝鮮半島では、東の海を東海（トンヘ）、西の海を西海（ソヘ）、そして南の海を南海（ナムヘ）と呼ぶ。その南海の中央に位置する島が南海島で、韓国では4番目に大きな島だ。隣接する昌善島（チャンソンド）の他、大小68の島を合わせて南海郡である。

尹の両親は基督教長老会の教会に通う敬虔な信者だった。基督教長老会は、金在俊、文益煥、安炳茂らが中心となって1953年、大韓イエス教長老会から分離した革新的プロテスタント教会で、民衆神学を唱え、軍事独裁政権時代には民主化運動の一翼を担った教団である。

そんな基督教長老会が、尹の故郷の唐項里に教会を建てる時、尹の母方の祖母と叔父たちは一家総出で教会建設から関わった。そして尹の母金碩礼（キム・ソンネ、1944年生まれ）は、この基督教長老会唐項教会で教師活動をしていた尹奉奭（ユン・ボンソク、1942年生まれ）と出会って結婚する。結婚当時、5人兄弟の末っ子だった尹奉奭には与えられた田畑一つなく、新婚所帯にはブリキのお膳と鍋があるだけだったという。

そんな貧しい農家、しかし真面目で敬虔なキリスト教徒である両親の下、尹は4人兄弟の長女として生まれた。物心ついた頃から、両親は尹が目覚ますと、もう働きに出ていなかったという。当然ながら、幼い兄弟たちの面倒を見るのは尹の役目だった。

「背中におぶった弟や妹が泣いてくれるのをいつも待ってたの。弟妹が泣くとオンマ（お母さん）のところに行って、『オンマ、お腹空いたって、おっばいちょうだいだって』と言って母親に赤ん坊を渡して、オンマがお乳をあげている間に飛び回って遊ぶのよ。だから時々お尻をつねって泣かしたりした」

朝は弟妹にご飯を食べさせて学校に行き、学校から帰ると夕食の支度をして、両親が畑から戻ると母親がおかずを足してみんなで食事をする。夏休みや冬休みには一日中、山で薪を拾い、畑仕事を手伝う。

「ある日、オンマにサツマイモを茹でておくように言われたんだけど、遊びたくてしょうがないのよ。それで、まだ小学校にも入っていない妹に教育するわけ。『火を焚いてずっと見てたら、釜から涙が出る、それから湯気が出る、そしたら火を消せばいい、だから涙と湯気が出るまでずっと火を焚いてればいい』って。そう言って妹を火の前に座らせて私は遊びに行っちゃった。しば～らく遊んで帰って来たら、妹がまだ火の前でじっと座ってるのよ。もうあたりは焦げ臭くて大変。何やってるのかって怒ったら、湯気は出たけど、涙が出てないって」

オンマが帰って来たら大変だ。尹は焦げたサツマイモを捨て、鍋を磨き、焦げ臭い匂いを払いのけ、必死に証拠隠滅をした。

しかし、そんな田舎での暮らしを辛いと思ったことはないという。尹にとって貧しい田舎暮らしはいつも幸せな記憶だ。そもそも貧乏だという認識自体がなかった。

「田舎暮らしは、私の情緒を豊かにしてくれたし、たくさんの経験をさせてくれた」

尹と歩いていると、目に入る木や草花の名前を次から次へと口にする。自然の中で、自然を愛して育ったことが、彼女の情緒の根底にあることがよく分かるのだ。

「松の葉が落ちるじゃない？ あれは火に燃やすとすっごく綺麗な。あれは火も綺麗だけど、燃えた後の灰も綺麗なのよ。でも、その灰が実はまだ生きていることがあってね、一度は、前の家の灰を集めておいた納屋から火が出て火事になったことがあったの。藁葺き屋根

の家がポーポー燃えて隣の家まで燃え移ったんだけど、それがあんまり綺麗で恍惚として見とれていた記憶が、今も映画みたいに目の前に広がるの」

幼い頃から尹の家には、物乞いがひっきりなしに訪ねて来たという。母親はその人たちを「お客様」と呼び、「ご飯ください」と来ると、いつでも食事を用意して出したという。後に、尹の一家が水原（スウォン）に引っ越した後、尹と母親が水原駅の地下道を歩いていると、「奥さん！ 奥さん！」とホームレスが駆け寄ってきて牛乳をくれたことがあった。顔を見ると、南海島で尹の家に入り浸っていた「お客様」の1人だった。母親は言った。

「あの人たちにとって、貴重な牛乳だっただろうに、それをくれるなんて」

尹は、潔癖症の母親が「お客様」たちが帰った後で食器を熱いお湯に入れて消毒するのを見ながら、忙しい母親の仕事を増やし、貧しい家の食糧を減らしていく「お客様」たちを恨めしく思う一方で、そんな母親を誇らしくも思ったという。一方、父親からは、良い生活習慣を学んだ。父親は毎晩、家庭内で礼拝をした。その影響で、寝る前に一日を振り返り日記を書き反省をする生活習慣が身についたのだという。父は、妹弟たちに「姉さんの言うことだけは何があっても聞かなくてはいけない。お前たちが生まれた時からお前たちの面倒を見たのはこの姉さんなんだから」と口癖のように言った。そして父自身が、尹の願いを叶えるためには何でもする人だった。後に高校進学を希望する尹のために、南海島を後にして水原に出たことがそれを如実に物語っている。

小学校3年生の時だったのだろうか。担任の教員から詩画展に出てみないかと言われた。それ以来毎年、地元で開かれる詩大会に出て賞を取り、詩人を夢見るようになる。小学校卒業時には優等賞、皆勤賞など学校からた

くさんの賞をもらい、その頃には勤勉な両親の働きが実って暮らし向きも徐々に向上して、尹の目から見ても随分と豊かになっていた。同級生の女の子たちの大半が小学校卒業と同時に釜山の衣服工場等に就職していく中で、尹は中学に進学する。

そして中学2年生の時、運命的な一冊の本に出会う。当時、基督教長老会女信徒会の全国総務をしていた金キョンヒが時々、南海島にやってきたのだが、中学生の時にはすでに教会の日曜学校で幼稚部の教師として活動していた尹に、金キョンヒがその本を差し出したのだ。『暁が明ける頃』。それは基督教長老会の女性牧師第一号となった楊貞信（ヤン・ジョンシン）の手記だった。それまで女性が牧師になれるとは夢にも思っていなかった尹に、その本は「女性も牧師になれるんだ」という驚きと希望を与えた。

「その時からずっと牧師になる夢を抱いて、中学3年になったら高校に進学しなきゃと思って、お父さん、私、高校に行きます」

幼い頃から苦勞のかけどおしだった長女の願いは何でも叶えたいと念じてきた父親はすぐに「わかった、高校に行こう」と応じるが、尹が暮らす島の南面に高校はなかった。ところが、ちょうど金キョンヒがいる水原教会で司祭の席が空いたという。そこで、父親が水原教会の司祭となり、尹は高校に進学するため中学3年生の時に、一家で水原に居を移したのである。

2. 水原での憂鬱な中学時代

水原の中学校に転校した初日、尹の自己紹介の第一声を迎えたのは同級生たちの嘲笑だった。

「どうして笑われているのか分からないのよ。自分の言葉が方言だなんて思ったこともない、ラジオで聞く標準語は知ってたけど、でも、私は私の方言が私の言語だとしか思っていないから」

戸惑う尹に担任の先生が言った。

「歌を歌ってごらんさい」

歌にも自信があった尹は先生に言われるがままに歌った。ところがまた教室では笑いの渦がまき起さる。それでも、自分の発音が方言だということを認識していなかった尹は、戸惑いながらも最後まで歌った。歌い終わった瞬間、「あなたは歌も方言で歌うのね」と生徒たちと一緒に大笑いする先生の言葉に傷ついた。さらに、「前の学校では一番だった子」として紹介された尹が、転校して数週間後に初めて受けたテストではクラスで20番だった。進度が全く違っていったのだ。

「田舎の学校では数学の先生が英語を教えてたんだから。習っている内容が全然違ってた。20番でもすごいくらいよ」

自分の言葉が人々に笑われる方言であることを知った上に、勉強も全然ついていけない。その時から尹はいつも憂鬱で、田舎に帰りたいと思いつける。しかし、それを両親に言うわけにはいかない。何しろ自分のために一家は故郷の南海島を捨てて出て来たのだ。

「とにかく両親が努力して、すっごく貧しく出発した家庭だったけど、大きくなるにつれて、ああ、うちは金持ちになって行ってるなって自分でも思うくらい、本当に両親は農業も知恵を使ってよくやってたんだと思う。サツマイモの保管も独特な方法でうまくやってたから、友達が遊びに来て、一年中いつでもミヒャンの家にはサツマイモがあるって羨ましがられたの。教会では両親も教師、私も幼稚園の教師。南海の村でうちを知らない人はいなかった」

ところが水原に引っ越すと、両親は教会の司祭。司祭は執事とも呼ばれる、教会のあらゆる雑用をする仕事だ。幼稚園の送迎バスの運転手をしたり、掃除をしたり。家は水原教会の敷地内に建てられたぼろ屋で、扉を開けるとすぐに部屋があり、もう一つ部屋があるだけ。一つの部屋に両親と

末の弟が寝て、もう一つの部屋で尹と弟妹の3人が寝る生活が始まったのだ。

「弟妹たちは私のせいで犠牲になったわけ。特に、すぐ下の弟は、都会暮らしに適応できなかった。あの子は田舎で飛び回って遊んでいれば本当に幸せに育つことができただろうに」

尹は、初登校日に方言を笑われた日から、テレビのニュースを見ながらアナウンサーの発音を覚え、毎晩、その発音で本を読む訓練をした。しかし、弟たちにはそのようなことはできず、学校や社会に反抗するしかなかったのだ。

初日から都会暮らしに失望した尹は、田舎に帰りたいと念じ続けるが、自分のために犠牲になった家族の前でそれを言うこともできず、日記にこんなことを書き綴った。

「私には仮面が三つある。苦勞する両親の前ではいつも笑顔の長女。弟妹たちには頼りがいのある姉。学校に行ったら勉強のできる優等生。三つの仮面をつけて暮らす」

思春期に誰にも反抗できずにいた尹は、自分の夢に反抗した。教会で雑用ができるたびに呼びつけられる父を見ながら、これがイエスの愛を実践する教会なのか？ 私はどうして牧師になんかなりたいと思ったんだろう？ こんな牧師なんかに。尹は、女性牧師になるという夢に反抗し、夢を捨てた。中学3年の時だった。

3. 高校, 大学

尹が高校に進学した1980年の5月、光州(クァンジュ)民衆蜂起が起きる。韓国内では報道されなかった光州での出来事を、尹は水原教会で教師として活動する大学生たちから聞いた。まるで別世界の話を聞いているかのようなだった。

光州民衆蜂起を武力で鎮圧した全斗煥による新たな軍事独裁時代の幕開けと共に高校に進学した尹の記憶には、とりわけ今でも忘れられない3人がいる。一人は、李ジンヒョ。ジンヒョの兄は高麗大学生だった。ある日、尹が親友のミヘと一緒にいるところにジンヒョが来て、兄から聞いた光州事件の話をした。それをミヘが家に帰って自分の叔母にしたらしい。叔母は米軍人と付き合っていた。ほどなく、ジンヒョが姿を消した。今でも尹は李ジンヒョの行方を探している。

もう一人、尹が気になって行方を捜しているのが趙ギチョルだ。趙は高校2年の時の担任教員で、小柄で顔も青白く小声で恥ずかしそうに話す男だった。純粹で弱々しい風貌のその教員も、ある日突然姿を消した。いなくなる前日、こんなことがあった。その日の最後の課目は国民倫理だった。大韓民国がいかに素晴らしい国かを教える国民倫理の授業が終わってホームルームのために入って来た趙は、黒板に板書された文字を見た途端、赤のチョークで大きくバツテンをして、「これは全部嘘です。こんなものは覚えなくていい」と言ったのだ。その日以来、趙は学校に現れなかった。

最後の一人は、高校3年の時の文法の先生だ。李ウニョン先生。ストレートのロングヘアの女性教員が卒業前の生徒たちに語った言葉が忘れられない。「私が高校の時に学んで真実だと思っていたことが、大学に入ってみたら真実ではないことが分かりました。そして高校の教壇に立って、私は自分が真実ではないと知ったことを、再び真実だと言って教えています。皆さんも大学に行けば分かるでしょう。」それは、教会で教師をする大学生たちから聞いた話と似ていた。先生が何かを暗示している。それが何なのか、はっきりとは分からないまでも、心に刻まなくてはならない言葉のように思えた。

このような中で、尹は一度捨てた夢を拾い上げ、再び牧師になる決心を

する。牧師になって農村に行き、農村で何か変化を起こしてみたいと思ったのだ。しかし、母は尹が教員になることを願った。女性の職業としては一番良いと。そこで、尹は漢陽大学の師範科に願書を出すふりをして、密かに韓神大学神学科への進学を計画する。漢陽大学は1期、韓神大学は2期だったので、1期が終われば2期大学に入ることを母親も承諾せざるを得ないだろうと考えた。漢陽大学の入学発表の日、母に実は願書を出していないことを告白した。

ところが母とは別の反対勢力がいた。尹の信仰に影響を与えた韓神大学の先輩たちと牧師だった。韓神大学の神学科に願書を出すためには、必ず牧師の推薦状が必要だったが、牧師は「神学は女性の運命を険しいものにする」と言ってなかなか書いてくれなかった。韓神大学は基督教長老会傘下の大学で、朴正熙政権時代から「デモの大学」として政権の目の敵になっていた。教授から学生まで全員でデモをする。デモに参加するために入学する学生がいるとまで言われていた。神学科は閉鎖され、哲学科と偽装して新入生を受け入れていた時代もあったほどだった。尹が願書を出した時が、神学科復活の年だった。推薦状を書いてくれるまで教会には出ないとストライキを起こして、やっと推薦状をもらい、念願の韓神大学神学科に入学した。

4. 女性問題への関わり、そして挺対協へ

1983年から1987年まで韓神大学で、「聖書を逆に解釈する」神学を学んだことは尹にとって大きな収穫だった。しかし一方で、進歩的な韓神大学でさえも男性的なキリスト教の一角を担っていることを思い知らされる日々でもあった。入学と同時に、男子学生や先輩たちは、尹を牧師夫人として品定めした。交際相手には「どうしても牧師にならなければいけないのか」と聞かれ、デモの時には彼の後に隠れて石を拾うように言われた。

再び教会に対する猜疑心がよみがえってきた。韓国の教会が女性信徒を動員し道具化するシステムに対して嫌気がさしていた中で、梨花女子大学大学院に進学したことが尹の進路を決定的に変えることになる。願書を出しに行ったその日、梨花女子大学総学生会の会長が催涙弾を打ち込むパーパーフォグ車にぶら下がって抵抗している姿を目の当たりにする。男たちの後から付いて行くしかない韓神大学のデモとはまるで違っていった。韓神大学では解決することができずにたまっていたモヤモヤが、梨花女子大学では問題にすらならなかった。牧師の道を進むよりも、女性たちと一緒にできる何かを探してみよう。

その最初のきっかけとなったのが、世界改革教会連盟（WARC）総会の女性分科幹事に応募したことだった。1988年に幹事として入り、1989年の総会に向けて1年間、準備をする過程で後の挺対協活動に繋がる体験をする。プログラムの項目の中にキーセン観光問題があったのだ。その資料を用意する過程で自ら打ち込んだ女性たちの事情が尹の心を捉える。学校を卒業して工場に勤め、同じ工場の男性工員と恋に落ち、同居をした末に捨てられて、喫茶店で働いた後にキーセン観光へと流れるといったストーリーを読みながら衝撃を受けたのだ。それは故郷南海島で小学校時代を共にし、卒業と共に釜山の靴工場や衣服工場、かつら工場に就職して行った同級生のヨンジャやチュンジャの話であり、ある日村に現れて「ヤンセッシ」²⁾と後ろ指をさされていたあの女の人の話だと思ったのだ。

「私は、娘も学校に行かせなければならないと考えた親の下に生まれたおかげでこうして安全に育つことができたけど、彼女たちは親から受けられなかった愛情を男に求めて裏切られて18歳、19歳でキーセンになってる。この女性たちのことが頭から離れなくなった」

2) 米軍の基地周辺で「売春」する女性たちは「ヤンセッシ」「ヤンカルボ」「ヤンコンジュ」などの別称で呼ばれた。ここで「ヤン」は「洋」の意。

WARC 総会での働きが認められて、総会終了後、大韓イエス教長老会に幹事として招かれ、女性伝導会で女性問題に関わるつもりで働いてみたが、あまりにも保守的なイエス教長老会とは全く折り合わず、1年で辞めて基督教長老会に戻り、故郷の南海島で人権問題、キーセン観光、挺身隊問題等を担当してさらに1年が経った頃、英語を勉強する必要を感じてオーストラリアに留学する。ところが3ヵ月経った頃、オーストラリアで開いたハンギョレ新聞に金学順ハルモニ³⁾の記事が載っているのを見た。

「それを見たら、私はオーストラリアで一体何をやってるんだろうって。恥ずかしいし、いたたまれなくて、エイ、韓国に帰ろうって」6ヵ月の授業料を払い込んでいたが、3ヵ月で帰って来てしまった。1991年末のことだ。挺対協には翌1992年1月に幹事として入った。

「その時から私の人生は、本当に激動的になりました。本当にありがたいことに、ハルモニたちとの出会いは、私の生意気な、英雄主義的な、青春時代に持ちうる英雄的な自己満足を根こそぎに打ち砕いて、完全に粉々にしてくれました、ハルモニたちが。実は初めに挺対協に入った頃、私は『この地の若者として』という表現をよく使っていたんです、今思うと。『この地の若者として、このような屈辱的な歴史を放置してきたことに怒りを感じる』、こんなことを言って。大学で講義する時にも、『あなた方は学生として、この歴史に沈黙できるのか』なんて。今思うと何も分かっていなかった」⁴⁾

3) 本稿では基本的に敬称を略すが、日本軍「慰安婦」被害者のみ、読者の理解を助けるため「ハルモニ」をつけて表記する。「ハルモニ」は朝鮮語で「おばあさん」の意。韓国では敬意を込めて使う語である。金学順ハルモニは1991年8月14日、記者会見を開き、韓国で初めて公に被害事実について語った日本軍「慰安婦」被害者で、1991年12月6日提訴の韓国太平洋戦争犠牲者遺族会による東京地裁への提訴にも原告として加わった。

4) 李娜榮「日本軍『慰安婦』問題解決運動史—ポストコロナルな正義のた

5. ハルモニたちとの出会い

挺対協は1990年11月16日、37の女性団体、市民団体等が集まって日本軍「慰安婦」問題の解決を掲げて結成された⁵⁾。翌1991年8月14日、金学順ハルモニが名乗り出て12月に日本で提訴した韓国太平洋戦争犠牲者遺族会訴訟の原告団にも加わると、韓国でも、日本でも大きく取り上げられ、1991年末から1992年初にかけて被害者の申告が一気に増えた。尹が挺対協に幹事として入ったのは、ちょうどその頃で、幹事として最初にした仕事が被害当事者たちからの申告電話の受付だった。

「電話がかかってくると、ソウル近辺の人だと事務所に来てもらうのね。当時の挺対協事務所は新聞記者たちも最初はなかなか探して来られないようなところだったから、私の特徴をハルモニに伝えて、大通りまで出て行って待ち合わせをして連れて来るわけ。大通りにはたくさんの人が行き来しているんだけど、ハルモニたちが来ると、あ、あの人だってすぐに分かる。表情が他の人たちと全然違うから。何か周りの視線を気にしながら歩いてくるあの様子は、人それぞれに違うんだけど、共通点があってすぐに分かる」

中でも印象に残っている人を一人挙げるとしたら金順徳（キム・スンドク）ハルモニだ。手土産に南京豆を入れた黒いビニール袋を下げて横断歩道の向こうに立っているその姿が、それまでに何度か見てきた、被害者たちに共通のあの姿だった。声をかけた。

「ハルモニ、電話を下さった方ですね？」

めの責任の伝承 3 運動の成長と拡大(1)『世界』2017年1月号。

5) 李娜榮「日本軍『慰安婦』問題解決運動史—ポストコロナルな正義のための責任の伝承—パイオニアたちの肖像—「挺対協運動」の起源と発展(1)『世界』2016年10月号。

返事がない。それでも黙ってついてくる。みすばらしい事務所を見て、金順徳ハルモニはやや当惑しているようにも見えた。ところがハルモニが切り出した話は、工場に働きに行ったという話だった。そして最後まで、工場に就職させてくれると言われたという話しかしない。そして帰ると言っていて立ち上がった。強要するわけにはいかず、「ではハルモニ、また何かあったらいつでも訪ねて来てください。工場で辛かったお話でも、いつでもしに来てください。ここでハルモニが話した内容は、ハルモニの承諾なしに外に出ることはありませんから」と、尹は金順徳ハルモニを見送った。ところがしばらくして、金順徳ハルモニが戻って来たのだ。そして、自らの被害体験を、絞り出すように語った。

このように被害者からの申告があると、尹が基本的な話を聞いた上で「挺身隊研究会」に伝え、研究会の研究者が後日あらためて連絡して、さらに詳しい話を聞くことになっていた。そのことを伝え、連絡してもいいかと尋ねると、金順徳ハルモニは、連絡は自分の方からするから絶対に電話はしないで欲しいと言い残して帰って行った。

結局、金順徳ハルモニはその後、すぐに水曜デモにも出て、人々の前で証言もするようになった。後に「ナムムの家」に入り、そこで生涯を終える。自らの死を予期していたのか、亡くなる前日、ハルモニはソウルにいる4人の子どもの家を一軒一軒訪ね歩いたという。そして、尹にも会いたいからナムムの家に来てくれという連絡が、その数日前にあった。会う日を約束したが、結局、尹が会いに行く前に亡くなったことが今も悔やまれてならない。

「亡くなるその日まで、本当に必死に、一生懸命に生きた人だった」

遠隔地から電話があると、バスや汽車を乗り継いで山奥の村まで訪ねて行った。訪ねて行って話を聞くと、一気に親密になることもあった。家族のいないハルモニは、訪ねて来る若い女性を娘のように迎えてくれた。そ

んなハルモニたちの中で、蔚山の尹頭伊（ユン・ドゥイ）ハルモニは特に忘れられない。ヘビースモーカーで教会に足繁く通う尹頭伊ハルモニは、尹が寝ている間に早朝礼拝に行き、戻って来ると「おお、父なる主よ」と言いながらタバコを深く吸い込んだ。寝ている尹を気遣って真っ暗な中で吸うタバコの火が毛布の上に落ちて毛布に火が付き大騒ぎになったこともあった。帰りには味噌や醤油や、娘のために買っておいてくれた人形など、必ず手土産を持たせてくれた尹頭伊ハルモニも、2009年に亡くなった。

挺対協で出会ったハルモニたちから聞く話は、その昔、南海島でお祖母さんと近所の女性たちから聞いた話の意味を尹に認識させる過程でもあった。

「今、その記憶、つまり挺対協の仕事をしながら、お祖母さんの話も……、ある日、幼い時に、髪を結ってもらいながら、お祖母さんの膝で、お祖母さんの話をいつも聞いていたんだけど、お祖母さんの従姉が挺身隊に引っ張られないために遠い親戚のお兄さんと結婚した、でも、その親戚のお兄さんが、そんなよく知っている女性と性関係ができると思う？ できないでしょう。それで毎日のように暴力を振るって、その従姉が早くに死んだ、従姉妹の中にそんな人がいたって言いながら、日本人が悪いと言っていた話も思い出したんです。私はその話をむか～し昔の話を聞きたいに聞いていたんだけど、そういう記憶が一つ、一つ、パズルのように組み合わせさせて行ったんです」⁶⁾

このように挺対協に申告してきたハルモニたちが全国から集まって互いを知り合う場となったのが、1992年5月の慰労会だった。ここで尹は、忘れられない場面を目撃する。金順徳ハルモニが「あ、あんたも？」と驚き

6) 前掲李娜榮, 2017年1月。

の声をあげると、文必琪（ムン・ピルギ）ハルモニが「えっ、姉さんも、あそこに行って来たの？」と叫び、「アイゴー」と抱き合って泣く姿だった。二人は解放後に同じ町に住んで知り合いながら、互いが同じ体験をした者同士であることを、この日初めて知ったのである。金福童（キム・ボクトン）ハルモニも、シンガポールの捕虜収容所で一緒だった女性に、この場で再会した。

ハルモニたちは酒を酌み交わし、歌を歌い、踊った。自らの体験が知られてしまうのではないかと気にして、近所の老人会では歌えなかった歌、踊れなかった踊りを思い切り歌い踊った。

「被害者たちの出会いがどれほど大切か、お互いをさげ出せる、楽にさげ出すことができる空間、互いに傷を負った人たち同士の出会いがどれほど重要かを、この経験から知った」

しかし、それは後に弊害も生むことになる。そしてその弊害が、尹が挺対協を辞めるきっかけにもなるのである。

6. 結婚、そして夫の逮捕

尹が挺対協の幹事になってほどなく、事務所に青白い顔のひよろっとした男が訪ねて来た。手土産に「蜂蜜チャング（クレヨンしんちゃん）」の袋菓子を持って。反核平和活動家、後に尹の夫になる金三石（キム・サムソク）だった。金は挺対協に「日本の軍国主義復活阻止と正しい過去清算のための連帯会議」を開こうと提案した。この連帯会議には、ソウル大総女学生会の会長で後に統一進歩党代表となる李正姫（イ・ジョンヒ）らも参加した。

連帯会議の準備過程で少しずつ金に親しみを感じ始めていた頃、尹は姜徳景（カン・ドッキョン）ハルモニと共に釜山大学に講演に出掛けた。講演会場でふと見ると、後の方に金三石が座っている。金の団体の代表がスバ

イ事件で逮捕され、金らは巻き込まれることを避けて地方に散っていたのだ。姜徳景ハルモニと共に尹が釜山に来ていることを知って、金は先輩と二人で会場を訪れたのである。

その日の夜、尹と姜徳景ハルモニは金福童ハルモニの家に泊まることになっていた。当時は、そんな風に地方講演に行くと、その地方のハルモニの家に泊まったりしたものだった。ホテルや旅館に泊まる経費が、挺対協にはなかったのだ。ところが、行く宛のない金と金の先輩も、一緒に付いて来た。結婚前の尹幹事が若い男を二人も連れて来たのだ。金福童ハルモニは目を丸くした。二間きりの家の一間に金と先輩が、もう一つの部屋に尹と姜徳景ハルモニ、金福童ハルモニが寝た。ところが金福童ハルモニが「あの二人は誰だ」と質問責めにして、なかなか寝かせてくれない。

「背の高いの（金）はちょっと見た目はいいけど、女に苦勞させそうだし、背の低いの（先輩）は本当に女を幸せにしそうなタイプだけど、見た目がちょっとねえ」

この時、尹はまだ金をさほど意識していなかったという。しかし、釜山の後も晋州（チンジュ）で講演し、姜徳景ハルモニを先にソウルに帰して、さらに尹は二人の男たちと南海岸を旅行し、故郷の南海島にも行った。

「バスに乗ってジグザグ道に行くからバスが左右に揺れる。右に傾く度に僕の太ももが尹幹事の太ももに触れる。その度に、何かかビリッ、ビリッと来るんだよ。そこら辺からお互いに意識し始めたんじゃないかな」と金は振り返る。尹は「そんなこと覚えてない。ただ、この人が海辺の大きな岩の上で歌を歌う姿を見て惹かれたんだと思う。この人は、歌を喉で歌うんじゃなくて、全身で歌う感じ。歌の歌詞のように生きたいという切実さを感じられて。その前にも彼の事務所で歌を聴いたことがあるんだけど、この人が歌うというと、どんなに暑い日でも、事務所の窓という窓、戸という戸をみんなで全部閉める

の。近所迷惑だから。その時にも好感を持ったと思う」

その後は急テンポで話が進んだ。12月には両家の親同士が会い、二人は同居を始めた。結婚式は翌1993年3月10日。結婚式の写真には姜徳景ハルモニ、金福童ハルモニ、金順徳ハルモニ、文必琪ハルモニ、李容洙（イ・ヨンス）ハルモニなど多数のハルモニたちが写っている。金福童ハルモニと姜徳景ハルモニは、我こそが二人の縁結びをした仲人だと、二人のなれそめを楽しそうに話した。

しかし、のどかな新婚生活はたった半年で壊される。結婚式から半年後の9月8日、安企部の捜査官10人がやってきて、金は自宅で逮捕されたのである。家宅搜索令状も持たずに土足で家に押し入り、金に手錠をかけ、図書等を押収した。その1時間ほど前、金の妹のウンジュも逮捕され、「金兄妹スパイ事件」がでっち上げられた。安企部は、二人が1992年1月から1993年5月にかけて日本に3～4回渡り、安企部が反国家団体と規定している韓統連の幹部らに会い、軍事機密文書を手渡し、工作金を受け取ったと発表した。もちろん、全く身に覚えのないことだった。

その日から金は17日間、殴打と性的な暴行など、あらゆる拷問を受ける一方、「女房を連行して取り調べをするぞ」といった脅迫を受けた。安企部は、二人の自宅での会話内容まで把握しており、至るところで盗聴をしていたことも明らかだった。

尹は、夫が捕まった翌日から、妊娠8ヵ月の身で、夫を救い出すため飛び回った。お腹の子に「少しだけ、もう少しだけ遅く生まれて」と声をかけながら。

まずは、夫が捕まって行ったところがどこなのかすら分からなかったため、拘置所という拘置所を探し、安企部の知り合いにも聞いた。記者たちに搜索を頼み、やっとどこにいるのか所在が分かった。逮捕から3日後だった。尹はすぐに安企部に行き、夫と妹のウンジュへの面会を要求した。

既に酷い拷問で目の焦点も合わず、何を言っているのか分からない夫からは何も情報を得られなかったが、妹のウンジュの言葉で真相が分かった。

「お義姉さん、ペク・フンヨンです。ペク・フンヨンにやられたんです」

その日、ウンジュは知り合いの映像作家に頼まれて、ある日本人から書類封筒を受け取ったところで安企部に現行犯逮捕されたのだ。その封筒の中には、金日成の回顧録等が入っていた。瞬間、ウンジュは「あの人が工作員だったのだ」と気がついた。「あの人」というのが、ウンジュに封筒を受け取ってきてくれるように頼んだ映像作家のペク・フンヨン（仮名ペク・イノ）だった。

尹はこの事実を人々に知らせた。

「昼間は挺対協事務所で仕事をして、夕方には人権運動サランバン⁷⁾に『出勤』してた。人権運動サランバンは人権問題に関わる事件をファックスで全国に送っていたから、夫の事件を全国に知らせてもらおうと思って。朝は挺対協出勤前にNCCに行ったり、アムネスティーに行ったり。勤務時間以外は全部、金三石釈放のために使ったわ。事件が工作員によるでっちあげであることを訴え、嘆願書を書いてもらって……」

ある日、水曜デモが終わって歩いていると、目の前にペク・フンヨンが立っていた。一緒に喫茶店に入った。そこには安企部の職員らしき男が先に来て別の席に座っていた。ペクが言った。

「俺は工作員じゃない。俺が工作員ではなかったと記者会見しなければ名誉毀損で告訴するぞ」

尹は答えた。

7) 在日韓国人政治犯として17年間獄中生活をした徐俊植らが1993年2月に結成した人権団体。

「告訴しなさい。私はあなたを工作員だと思ってるから、そんな記者会見をするつもりはありませんから」

結局、告訴はおろか、その後ペクは何もせず、姿を消した。そして、翌1994年10月28日、ベルリンで記者会見を開いて、自身が安企部の工作員であり、「金兄妹スパイ事件」をでっち上げたことを告白し、これを指示した安企部の上司らの会話を撮った映像も暴露した。奇しくも、懲役4年、資格停止4年の判決が最高裁で確定した3日後のことだった。大韓弁護士協会に設置されていた「金兄妹でっち上げスパイ事件対策委員会」から弁護士2名がドイツに飛んでペクに事情聴取し、国会で開かれた「兄妹スパイ事件真相究明委員会」でその内容を発表した。しかし、確定した刑が覆されることはない。金は、大田矯導所に収監され、1997年9月30日に出所する。

金が捕まった1993年9月は、文民政権である金泳三政権下の通常国会で、安企部改正案と安企部の予算削減をめぐる野党が綱引きをしていた時だった。そこでスパイ検挙の実績が必要になった安企部が、工作員を利用してでっち上げたのが、「金兄妹スパイ事件」だったのである。

金は2004年12月、当時を振り返って、次のように書いている。

「私の妻である尹美香（当時挺対協幹事）が9月20日午後4時頃、安企部員らを『違法連行と過酷行為容疑』で取り調べ処罰するよう求めて、ソウル地検に告発状を提出しました。しかし、検察は『容疑なし』判定を下しました。新婚6ヵ月で『スパイの妻』になった尹美香は、臨月の身で夫の救援活動、挺対協活動、集会参加、面会、子育てなど1人4役、5役をしなければならず、毎日疲弊していきました。今も妻を見ると、新婚時代に苦勞をさせた私は罪人だと思います」

7. 挺対協に辞表

1997年、今度は尹自身が検察の取り調べを受けることになる。ハルモニたち8人が尹を詐欺横領罪で告訴したのだ。

「あの時の暗澹たる気持ち。一晩中、娘を抱いて泣いたわ。その日から憂鬱症がまた始まったの」

満3歳になった娘は可愛い盛りだった。そんな娘を実家に預けて挺対協活動をする尹に、母は「母親が幸せでないと娘も幸せになれない、月給30万ウォン（約3万円）もらって、ハルモニたちのためにそんなに苦労して、娘とろくに一緒に過ごすこともできないで、もう挺対協を辞めなさい」と口癖のように言っていた。そんな時の告訴だった。

韓国の検察システムは日本とは違い、告訴状が出されると検察が受理の如何を検討するのではなく、まずは全て取り調べをおこなう。尹は、夫のことで何度か告発状を出しに行った検察に、今度は挺対協の通帳や帳簿を持って、自ら取り調べを受けに行かなければならなかった。

「誰か（ハルモニ）が何かを言う。そうするとそれが回り回って話に尾ひれがついて、それがハルモニたちの間で『事実』になってしまい、もう信じて疑わなくなってしまう。そんなことが当時は多々あったから」

ハルモニたちが互いに出会い、互いの経験を心置きなく語り合い、歌い、踊り、泣き、笑える、そんな空間ができたことの意義と共に生まれた「弊害」だった

例えばこんなことだ。どこか地方で挺対協支援のイベントが催される、尹がハルモニと一緒にいく、主催者がイベントで集まった挺対協活動への募金を尹に渡す、それを見たハルモニが疑念を抱く、誰か他のハルモニに言う、その二人の間で尹幹事が懐に入れたのではないかという疑念が生ま

れる、回り回る過程でそれは「疑念」ではなく「事実」になる。そんな疑念をぶつけられて、そのお金が入金された挺対協の通帳を見せ、帳簿を見せながら説明したことも度々だった。

欺かれて「慰安婦」にされ、戦後の韓国でも辛酸をなめてきた日本軍「慰安婦」被害者たちは、容易に他者を信じない。他者を信じることも、実は己を信じることも、できなくなっていることこそが、彼女たちの被害の断面なのだ。それが分かるからこそ、尹は粘り強くハルモニたちの「疑念」に対応してきた。しかし、ついに一部のハルモニたちが、告訴という手段に出るほどに、「疑念」を増幅させてしまったのだ。

「その当時、私は、『慰安婦』問題で講演をしたり、原稿を書いたりすることに關しては、たとえ勤務時間外に徹夜をして書いた原稿であっても、それが『慰安婦』問題に關するものである限りは、原稿料や講演料は実費を除いて全部、挺対協への後援金だと考えて挺対協に入れる、それが私の哲学だった」

それは、挺対協の共同代表だった尹貞玉から学んだ姿勢だった。尹貞玉は当時、日本で講演することも多かったが、自分で立て替えて航空券を買って日本に行き、日本から戻ると、日本の主催団体が渡した航空券代まで全額、挺対協に入れていた。

「尹先生のそういう姿勢を見て感動して学んだの。尹先生が私の経済観念、ある種の公的な経済観念のメンターだった」

挺対協の帳簿は全くシンプルなものだった。当時は月々後援金を出してくれるような会員もなく、挺対協の実行委員たちが毎月決まった金額を入れるのと、尹貞玉や李効再⁸⁾や尹美香が講演に行ってもらった講演料、そ

8) 尹貞玉(ユン・ジョンオク)と李効再(イ・ヒョジュ)は、挺対協の初代共同代表。二人が挺対協運動に果した役割については、前掲李娜榮、2016年10月。

れらが収入の全てだったからだ。挺対協の実行委員たちは、名実ともに手弁当で活動をしていたのである。通帳に入ってくるお金はほとんどなかった。

検事もその通帳と帳簿を見て驚いた。ここまで献身しているのに告訴されるなんて。告訴したハルモニたちを逆に誣告罪で訴えることもできると、検事は言った。

「これも、実は被害の後遺症なんです。今まで近づいて来る人々から裏切られ、お金をだまし取られて来たから、自分に近づいて来る人々を信じることができなくなって、自分たちの名前を売って金儲けをしていると考えてしまうんです。これも私たちが引き受けなければならぬ責任だと思います」

検事にはそう言って帰ってきたが、次の週の水曜デモの時、尹はハルモニたちの目を見るができなかった。検察では頭で理解していることを話した尹だったが、「頭ではそう自分に言い聞かせて、続けなきゃ、続けなきゃって思おうとするんだけど、それがここ（喉）から下に下がってこない、どうしても下がって来ないの」

尹は、共同代表の李効再に辞表を出した。引き留める李効再の言うことも聞かずに、尹はそのまま挺対協を辞めた。

「97年の時には私はまだ若くて、夫のこともあってすごくしんどい時だったから堪えられなかったんだと思う。私がこんなに大変な思いをしながらやってるのに、生まれたばかりの娘を実家に預けて、産後の休暇もろくにとらないで頑張ってきたのにつて。娘を産んで1ヵ月もしないで100回目の水曜デモだったし、休むわけにいかなかった。仕事が終わって実家に娘を迎えに行く時、バスを降りて実家までの300メートルを歩いて行くことができなかったの。腰が痛くて。腰を曲げてヨロヨロと横断歩道を渡っていると、心配した父が迎えに来て

私を支えてくれた。産後にきちんと休まなかったから腰に来たのね。それなのに、ホルモニたちがそうしたということに、あの時は堪えられなかったんだと思う」

8. 民和協，女性財団，そして再び挺対協に

挺対協を辞めた後、1998年、結成されたばかりの「民族和解協力汎国民協議会」（民和協）の結成に関わる。民和協とは、1998年6月に朝鮮民主主義人民共和国が「統一を希望する南北および海外団体と個人との接触と往来、協力の強化」を目的に「民族和解協議会」を結成して、南側に民族の和解と団結をはかる大祝典の開催を提案してきたことに対し、当時の金大中政権が立ち上げた「大祝典南側本部」に、保守と革新の社会团体や政党を包括的に網羅して結成した統一運動のための常設機関だった。立ち上げは1998年9月だ。

ところが民和協は、政治家志望の男たちに占められた組織だった。そこで女性分科を作るべきだと考え、女性委員会をつくり、1年ほどした頃に金剛山に向かう船中で討論会を開いた。その討論会が終わった時、これに参加していた李効再（挺対協共同代表）から「女性財団」をつくるという話を聞く。「韓国女性財団（結成当初の名称は「女性基金推進委員会）」は、各界の女性リーダーらと124の非営利女性団体が集まって設立した韓国初の市民社会公益財団で、女性のための民間公益財団である。名誉顧問には金大中大統領夫人の李姫鎬が、理事長には女性運動のリーダーとして名高い朴英淑（パク・ヨンスク）が就いた。女性たちの力で、女性の能力開発と女性運動を支援する財団を立ち上げるという話を聞いて、男たちの統一運動に辟易としていた尹は、迷わず女性財団に飛び込んだ。1998年のことである。

1年の準備期間を経て1999年12月に設立された女性財団で、尹は基金づくりの様々な方法とシステムを学ぶ。女性財団の3年間に学んだノウハウ

は、その後の挺対協活動に大きく役立つことになる。

尹は女性財団の仕事にやり甲斐を感じ、挺対協時代には考えられなかったような額の給料が月々きちんと支給され、有給休暇も取れて家族と旅行にも行ける生活を満喫した。今、写真を見ると、この時期に一番多く家族旅行をしていたことが分かる。

「女性財団にいた頃には親しかったハルモニたちに電話をかけて、ハルモニ、私、今はちゃんとお給料ももらえて、お休みの日にはちゃんと休めて、家族とゆっくり過ごす時間も持てて、すごく幸せ、なんて嫌みを言ったりしてたの」

ところが2001年の年の瀬、池銀姫⁹⁾から運命の電話がかかってきた。挺対協の事務総長をしてくれる人を探している、いくら考えても、あなたしかいない、戻って来て欲しい、と。

仕事にやり甲斐を感じ、プライベートも充実していた時である。即答はできなかった。「少しだけ考えさせてください」と電話を切って、1週間考えて復帰を決めた。理事長の朴英淑に辞表を出し、「先生、私は挺対協の仕事がやりたいんです」と言うと、朴は尹を「不思議な動物を見るような目」でしばらく見つめた後、「あの慰安婦の仕事がそんなにいいの？あなたはあれをやって楽しいの？」と言い、辞表を受理しようとしな。 「私はあの仕事が好きなんです」と答えて、残務処理と引き継ぎをして財団を辞めた。

9. 姜徳景ハルモニとの約束

尹は実際、「あの仕事が好きで」「楽しくて」戻ったわけではなかった。池銀姫からの電話を切った後、尹の頭に浮かんだのは姜徳景ハルモニ

9) 池銀姫（チ・ウニ）。1998年から挺対協の共同代表。その後、盧武鉉政権下で女性部（女性省）長官を務めた。

との「約束」だったのだ。

「姜徳景ハルモニは、私にとって特別な人だったの。結婚する時にも、ハルモニは20万ウォン（約2万円）を封筒に入れて持って来て、結婚の費用に使って。当時のハルモニにとって20万ウォンは本当に大きな金額。私はもらえないって言ったんだけど、ハルモニは、自分には娘も孫もない、だから母親がくれるんだと思って受け取って欲しいって。今でも、姜徳景ハルモニのことを話そうとすると涙が出る」

初めて挺対協の事務所を訪ねて来た時、姜徳景ハルモニは朝鮮戦争で傷痍軍人となった弟に連れられて来たという。当時、挺対協を訪れるハルモニたちは家族に知られないようにこっそりと訪ねて来るのが普通だったから、尹は姜ハルモニが家族に連れられて来たことに安堵を覚えたという。

「姜徳景ハルモニの家に初めて行った時には、もう本当にショックだった」

畑のビニールハウスの管理をして暮らしていた姜徳景ハルモニは、ビニールハウスの脇にある倉庫のようなところに、ほんの小さな住居空間をしつらえて暮らしていた。その上には高圧電線が走っていた。

「その、本当に小さな空間に、ハルモニがちょこんと座っていたの。

あの家を見た時には本当に言葉が出なかった」

1992年5月の慰労会で初めて一堂に会したハルモニたちに、今、何が必要か、一人ずつ発言を求めた時、姜徳景ハルモニは「私は今、ビニールハウスの倉庫に住んでいるが、主人から、そこも出るように言われています。部屋一間でいいので、路頭に迷わずに暮らせる家が欲しいです」。

住居に関する悩みは、その場に集まったハルモニたち全員の悩みだったが、姜徳景ハルモニの状況は特に深刻だった。当時、挺対協では1ヵ月に1回、構成団体の代表者会議を開いていた。その場でハルモニたちが暮ら

す住居の問題を提起した。議論の末、仏教団体がこれを担当することになり、挺対協と共に募金活動を展開し、ソウルの麻浦区西橋洞に「ナムムの家」を開所した¹⁰⁾。

「実際、ナムムの家は姜徳景ハルモニのためにつくったものだった」

姜徳景ハルモニは1997年2月に亡くなるまで、最も激烈に日本軍「慰安婦」問題解決のために闘った人だ。比較的裕福な家庭に生まれ、女学校に通っていた時、成績優秀であったがために女子勤労挺身隊に選ばれて日本の工場に行き、そこを逃げ出して捕まり「慰安婦」にされたという経歴を持つ姜徳景ハルモニは、他のハルモニたちとはどこか違っていった。読み書きも充分にでき、絵を描いても、歌を歌っても、全てに抜き出していた。

日本が提案したアジア女性基金に対して、当初から明確に反対表明をしていた姜徳景ハルモニは、基金計画発表直後の1994年に来日した際、基金関係者と挺対協との話し合いの場で、「国民の募金をもらうくらいなら、私はこのまま死んだ方がいいんです。私が死んでも、ここにいる若い人たちが私の意志を継いでくれると信じていることができるからです」と静かに、しかしきっぱりと語った。その言葉どおり、姜徳景ハルモニはその後、肺癌と闘いながら最後まで「国民基金」に反対し、「私たちのような女性がいたことを全世界に知らせて欲しい」と訴え続けた¹¹⁾。

「ハルモニが最後まで闘う意志を捨てずに必死にもがく姿を見ながら、『ハルモニ、楽に目を閉じてください。亡くなっても、私がハルモニの意志を継いで、一生懸命にやります。絶対に諦めません』って

10) 現在、京畿道広州にある「ナムムの家」は、ソウル市麻浦区西橋洞で出発したもので、ソウルで始まった当初は挺対協の管理下にあった。現在は完全に独立して、挺対協と協力しつつ、独自の運動を展開している。

11) 姜徳景ハルモニのアジア女性基金に対する反対の意思や、闘病生活の様子、最期の様子は映画『ナムムの家Ⅱ』や『記憶と生きる』等の映像作品に収められている。

約束した、あの約束が頭に浮かんだの。実際、あの約束をした時には本気ではなかったと思う。偽善があったと思う。ホルモンを早く楽にしてあげたいという気持ちで、本気でその約束を最後まで守る覚悟は私にはなかったと思う」

ところが池銀姫の電話を受けて、思い出したのは「あの約束」だった。1週間ずっと「あの約束」が頭から離れない。

「(挺対協に戻った方が)気が楽だと思ったの。あの事件から数年経って、今ならああいう状況も克服できるという自信も少しできていたし」

2002年1月、尹は挺対協に復帰した。事務局長、事務総長を経て、2008年から常任代表。女性財団での経験を身につけて挺対協に戻った尹は、2000年女性国際戦犯法廷後の挺対協運動を大きく転換させ飛躍させていく。「慰安婦」問題に「オールイン」した尹の活動を一番よく知っているのはサバイバー（「慰安婦」被害者）たちだろう。尹が挺対協に戻った時、「もう外でお金を儲ける仕事なくなったの？ また挺対協に戻って、せいぜいお金儲けしなさい」と皮肉を言った金福童ホルモンも、その後、挺対協と共に世界を駆け回って見事なまでの平和活動家に変身し、挺対協との強い信頼関係を築いてきた。

金福童ホルモニに、今、尹をどう思うか聞いてみた。

「テポ？（「テピヨ＝代表」を金ホルモニは慶尚道訛りで「テポ」と発音する）尹デポは私の娘。実の娘と同じ。テポの夫は私の婿、娘は私の孫。尹デポは私の家族だから」

日本軍「慰安婦」被害者が抱える「傷」を深く理解し、自身の人生をかけて受け止めようとしてきた尹の思いが、長い歳月をかけて確実に伝わり始めている。